岡山の病院力

29

毎週火曜日掲載

ホームページ
「岡山の病院力」
http://iryo.sanyo.oni.co.jp/

金田病院　真庭市西原

☎0867・52・1191

金田病院は市の中核医療機関。年間の外来患者は延べ6万7500人、入院は6万200人に上る。最近は、発症間もない急性期の脳梗塞治療をはじめ、すべての治療の基礎となる栄養支援のチーム医療やがんの化学療法、お年寄りに多い骨折の治療に力を入れ、病院食などアメニティーも充実している。（中浜隆宏）

金田　道弘院長

拠点的役割担い体制強化

金田病院は、一九五一年に創立した特定医療法人の病院。ベッド数百七十七床の中規模病院ながら、大病院の多い岡山、倉敷などの都市部と異なり、真庭市を中心に新見市も含めた広域の拠点的役割が期待されている。

例えば救急医療。「すべての患者を引き受ける」を原則に夜間、休日は当直医のほか、自宅待機の医師らを一、二人確保している。救急搬送は年七百人弱と真庭、新見市の医療機関で最も多い。看護師、診療放射線技師、臨床検査技師などの応援協力も万全だ。

岡山県北の医療充実の期待を担い四月以降、常勤医師三人が加わり十三人となった。看護体制は十月から最高レベルの「患者七人に看護師一人」。電子カルテシステムも五年前に全面稼働し、来年春からは疾患別に診療報酬を定額にするDPC（包括評価）実施病院を目指している。

真庭の温かい人と文化にはぐくまれ五十七年。今後も住民に必要とされる病院であり続けるため精進したい。

脳梗塞治療

患者受け入れ迅速化

tPA投与増え効果

患者のMRI画像を検査スタッフと検討する木下医長（左端）と遠部副院長（右端）

「左の手足がしびれて動かない」。新見市の八十代男性が二月中旬、救急車で金田病院に運ばれてきた。二時間前に自宅で異変を感じたという。救急車で行った同市内の病院で専門的治療が必要とされ搬送されてきた。

脳神経外科の遠部英昭副院長と木下公久医長は診察やMRI（磁気共鳴画像装置）検査の結果、脳の血管が血の塊（血栓）で詰まる脳梗塞と診断。病院到着から五十分後には血栓を溶かす薬・tPAを注射で投与し始めた。症状は次第に回復。男性はリハビリ後の三月下旬、軽いまひは残ったが、自分の足で歩いて退院できた。

真庭市で唯一、脳神経外科医が二人常勤する同病院。年三十―四十人に上る救急搬入の脳梗塞患者の受け入れ体制を昨年充実、整備。今年七月に岡山県保健医療計画で脳出血、くも膜下出血を合わせた脳卒中の超急性期の専門的な診療が二十四時間可能な医療機関に位置づけられた。こうした病院がない新見市からの受診も多い。

きっかけは二〇〇五年、積極的な治療法が乏しかった脳梗塞でtPAに健康保険が適用されたこと。ただ、発症から時間がたって使うと脳出血の副作用を招く恐れがあり、投与は発症三時間以内に限られる。治療の迅速化が急務となった。

夜間や休日は救急搬送の連絡を受けた看護師が当直医の判断を待たず遠部副院長、木下医長や検査スタッフを呼び出すなど患者到着前に脳卒中チームがそろう体制を整えた。さらに、救急総括医長を兼ねる木下医師が真庭、新見市消防本部で勉強会を重ね、速やかな搬送を呼び掛けた。

その結果、救急搬送された患者のうち、発症二時間以内の来院が半数近くに達し、搬入から治療開始までも一時間以内に短縮。患者の5・0%だけだったtPAの使用は28・0%に増えた。これまで投与した十八人のうち、五人はほぼ症状がなくなるまで劇的に回復。四人は軽いまひが残ったが、介助なしで日常生活を送れている。

九人は寝たきりなど重い障害が残ったものの、「亡くなったり、副作用の出た患者はいない」と遠部副院長は効果を説明。「地域向け啓発活動を今後、さらに広げたい」と語っている。

栄養サポートチーム

職種を超え協力

カンファレンスで情報を交換する三村医長（左から2人目）ら栄養サポートチームのメンバー

食事量が減った、食べ物がのみ込みにくい―。そんな患者の栄養面の課題に、職種を超えて情報と知識を出し合い最良の支援を探るのが栄養サポートチーム（NST）だ。

メンバーは医師、看護師、管理栄養士、薬剤師、臨床検査技師、理学療法士の二十人余。体重の増減、えん下（のみ込み）障害の有無などを看護師が評価する簡易栄養スクリーニングで栄養不良かその恐れがある患者十人前後を対象に、二週間おきのカンファレンスで意見を交わす。

「補助食品で栄養を補う」「食事にとろみをつける」など検討結果は主治医に提案。チームでも対象患者を回診し、栄養状態と関係が深い床ずれやえん下をチェックする。

二〇〇五年の開始から三年半で約七百人の患者にかかわった。日本静脈経腸栄養学会のNST稼働施設にも認定。チームを束ねる三村卓司・外科医長は「栄養は医療の基礎。栄養を重視することで床ずれ改善、手術後の早期離床・回復が図れた症例をいくつも経験した」と成果を挙げる。

入院患者の床ずれ発生率は1%以下に抑えられ、長期入院のお年寄りが多い医療療養病棟（四十七床）でも最近三年間、床ずれの発症がないという。

がん患者らが対象の緩和ケアや救急医療のチームも発足。三村医長は「チーム医療は今や医療の質を高めるために欠かせない。NSTが軌道に乗ったことで職種を超えた協力体制ができた」と話している。

がん化学療法

海野　正俊内科医長

県北で初めての専門医

がん治療で手術、放射線治療と並ぶ柱が抗がん剤による化学療法。内科の海野正俊医長は四月、そのエキスパートである日本臨床腫瘍学会のがん薬物療法専門医に岡山県北で初めて認定された。

海野医長は岡山大卒業後、同大病院や愛媛県の病院などをへて二〇〇三年から金田病院勤務。悪性リンパ腫、白血病など血液のがん、胃、大腸など消化器がんの手術後や再発時、進行肺がんなど、これまでに約百二十例の化学療法を手掛けた。

同病院ではがんのほか、再生不良性貧血など血液の病気を含む約二百五十人の患者を担当。入院せず通院で抗がん剤を投与する外来治療も行っている。海野医長は「今後も標準と認められたがん治療を提供したい」と話している。

人気の病院食

バラエティーに富む味

病院のセールスポイントの一つが食事。蒜山おこわ、ちらしずし、ビビンバ、魚の煮付け、肉じゃが…。バラエティーに富んだ味は入院患者に人気だ。

スタッフは栄養士三人と調理師十人、調理員四人。献立は毎月一回、栄養士と調理主任が集まり、伝来のレシピを参考に減塩など工夫を加え考える。

患者食（普通食）と職員食は同じメニューで患者、職員の意見を取り入れている。治療食は、のみ込みが難しい人にはおかずを刻み、スープにとろみを加えるなど一人一人の病状に配慮。誕生日には手作りのメッセージカードも添えている。

妹尾富美子課長

「主婦が家族に作るような家庭の味を目指している」と管理栄養士の妹尾富美子・栄養課長。患者の入院、退院時は病室で栄養指導も担い「今後は地域にも情報発信したい」と張り切っている。

コンシェルジュ

細田　麻衣子さん

細かい心配り好評

「こんにちは」。病院に入ると、カウンターから優しく声を掛けるのがコンシェルジュの細田麻衣子さんだ。

コンシェルジュはフランス語で相談役やお客さま係の意味。もともとホテルで活躍していたが、最近は病院も配置し始めた。元保育士の細田さんは二〇〇五年に金田病院初のコンシェルジュに採用。今夏、民間資格のホスピタルコンシェルジュに認定された。

普段は外来フロアで患者を案内したり問い合わせに応じる。病院広報紙やホームページに「コンシェルジュ日記」も連載。最近は、退院する患者に病院への要望を聞き担当者に伝える役も担う。

足の不自由な患者が来院する際は事前に車いすを用意するなど、細かい心配りは患者に好評。医療関係者にも注目され、真庭、倉敷市や東京都、石川県の病院、高校などで講演した。細田さんは「患者と同じ目線での対応を心掛け、安心と感動を届けたい」と目を輝かせている。

整形外科

坂田　賢一郎医長

昨年度201件の手術執刀

金田病院の昨年度手術のうち、半数以上の二百一件を占めたのが整形外科。それを坂田賢一郎医長はほぼ一人で執刀している。

岡山大卒業後、香川労災、岡山市民病院などを経て二〇〇六年から金田病院勤務。外来診療の傍ら、週四日手術を行う。特に骨折など外傷治療の経験が豊富。昨年度も大腿骨などの骨折整復手術が百四件を占めた。患者の体の負担が軽い関節鏡による半月板損傷手術も十六件行った。

骨折の患者はお年寄りが多い。坂田医長は「安全、迅速な手術はもちろん、手術後もリハビリテーション科と連携し早期からの機能訓練を心掛け、寝たきりを防いでいる」と話している。